

## 市長記者会見記録

日時：2022年4月19日（火）14時00分～15時03分

場所：第3庁舎18階 講堂

議題：かわさきプラスチック循環プロジェクト設立について（環境局）  
市政一般

### <内容>

#### <かわさきプラスチック循環プロジェクト設立について>

【司会】 ただいまから市長記者会見を始めます。本日の議題は、「かわさきプラスチック循環プロジェクト設立について」となっております。

まず初めに、本日の記者会見に御同席いただいている皆様を御紹介いたします。

プロジェクトの参加事業者様でありますJ&T環境株式会社代表取締役、露口哲男様でございます。

続きまして、ペトリファインテクノロジー株式会社代表取締役社長、伊賀大悟様でございます。

続きまして、アサヒ飲料株式会社常務取締役、大越洋二様でございます。

続きまして、サントリーホールディングス株式会社執行役員・サプライチェーン本部副本部長、藤原正明様でございます。

続きまして、株式会社イトーヨーカ堂CSR・SDGs推進部ゼネラルマネジャー、小山遊子様でございます。

続きまして、株式会社セブン-イレブン・ジャパンサステナビリティ推進室ゼネラルマネジャー、吉田希美枝様でございます。

皆様には後ほど、プロジェクトでの取組の御説明等をしていただきます。

それでは、福田市長から本議題について御説明いたします。市長、よろしく申し上げます。

【市長】 よろしく申し上げます。かわさきプラスチック循環プロジェクトの設立について御説明をさせていただきます。プラスチックは、利便性や衛生面の観点から、様々な容器や包装に利用され、私たちの生活に不可欠な素材である一方、地球温暖化や海洋プラスチック問題など、プラスチックを取り巻く様々な環境課題に対応していく必要がございます。昨今、新型コロナウイルス感染症の影響によるテイクアウトやデリバリーの利用など、ライフスタイルの変化などにより、プラスチックごみ

の排出量は増加傾向であり、本市が目指す脱炭素社会の実現においても、プラスチック資源循環の取組は非常に重要であると考えております。

令和4年4月1日には、プラスチックに係る資源循環の促進等に関する法律が施行され、コンビニエンスストアなどで提供されるプラスチックスプーンなどの特定プラスチック製品の提供方法の工夫が求められるなど、プラスチック全般に関わる全ての事業者、市民、行政の取組が求められております。このような社会状況の中、このたび、かわさきプラスチック循環プロジェクトを設立し、本市のプラスチック資源循環に向けたプラットフォームとして取組を進めてまいります。

プラスチック資源循環に取り組む上で、本市の特性として、環境意識の高い市民、事業者との協働の取組や、優れた環境技術、環境産業が集積しているということがございます。このような本市の特性を生かし、行政だけでなく、事業者と連携しまして、そして市民の行動変容を促し、本プロジェクトを通じて川崎市のプラスチック循環のムーブメントを創出させていきたいと考えております。

本日は、本プロジェクトに参加をいただきましたJ&T環境様、ペットリファインテクノロジー様、アサヒ飲料様、サントリーホールディングス様、イトーヨーカ堂様、セブン-イレブン・ジャパン様に御出席をいただいております。後ほど、本プロジェクトでの取組などについてコメントをいただく予定でございます。

本プロジェクトの設立は、プラスチック資源循環に向けたスタートラインですので、まずは市内のリサイクル事業者様の活用が見込め、ボトルtoボトルというリサイクルの結果が分かりやすいペットボトルの水平リサイクルの取組を先行的に実施し、今後、環境先進都市として、100%プラリサイクル都市を目指し、市民、事業者の皆様とともに、さらなる取組を進めてまいります。

続いて、本プロジェクトのポイントを3点御説明いたします。

1点目として、ペットボトルのリサイクルには、大きく分けると、マテリアルリサイクルとケミカルリサイクルの2つのリサイクル技術がございます。この2つのリサイクルを市域内で実施できるのは、全国で唯一、川崎市のみとなっております。リサイクル技術については、後ほど事業者様から御説明があると存じますが、全国で川崎市のみが可能である2つのリサイクル技術を生かし、本日御出席の事業者様とともに連携し、市民の皆様を巻き込んだ取組を進めてまいります。

2点目として、お配りいたしました資料3ページのイメージを御覧ください。こちらは、市内でのペットボトル循環を分かりやすく表現したイメージです。2つのリサイクル技術を、マテリアルの環とケミカルの環と表現し、そこに市民の皆様の主体的

なりサイクル行動を促すための回収拠点の環を加えた3つの環を本プロジェクトのコンセプトイメージとして、市民の皆様に分かりやすく波及させていくことで、環境配慮型のライフスタイルへの行動変容を促してまいりたいと存じます。

最後に3点目として、プラスチック資源循環には、あらゆる主体が積極的に取り組む必要があると考えております。今後、本日御出席をいただいているリサイクル事業者様、製造事業者様、小売事業者様と、行政、市民という、あらゆる主体が一体となって、ペットボトルの取組だけでなく、プラスチック製容器包装、プラスチック製品など、あらゆるプラスチックの資源循環の取組や、回収拠点の取組を進めていくためのプラットフォームとなるべく、様々な主体と連携した取組を進めてまいります。

さらに、本プロジェクトの取組が市民の皆様の行動変容のきっかけとなり、本市が抱える課題である、分別されずに焼却されてしまっているプラスチック製容器包装をはじめとしたプラスチックの資源循環への転換につながることを大いに期待しております。

今後、市内でプラスチック資源循環に取り組む様々な事業者様や団体などに対して、本プロジェクトの参加を促し、さらなる取組を進め、本プロジェクトを育てていきたいと考えております。

かわさきプラスチック循環プロジェクトの説明は以上でございます。

【司会】 市長、お席のほうにお願いいたします。

続きまして、本日御同席いただきました皆様から、プロジェクトでの取組等の御説明をお願いしたいと存じます。露口様、演台のほうへお願いいたします。

初めに、J & T環境株式会社代表取締役、露口哲男様、よろしくお願ひいたします。

【露口様】 ただいま御紹介にあずかりましたJ & T環境、露口と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。私ども、リサイクル事業を営んでおりますけれども、創業の地の一つが川崎市と言っても過言ではございません。特徴といたしましては、そこで製鉄所がございます。J F Eスチールという製鉄所です。その中でリサイクル施設を複数持っておりまして、その中の一つがペットボトルリサイクルでございます。2004年ぐらいから、私どもとしてはペットボトルのマテリアルリサイクル事業というのを開始いたしまして、当時は繊維会社さんに向けて、ペットボトルを破碎、洗浄して、フレークという形にするわけなんですけれども、こういう白い破碎、洗浄したものの、これを専用に供給をさせていただいていたということでございます。

それをずっと続けておりましたけれども、世の中はどんどん変わってまいりまして、2012年頃から、今度はボトル to ボトル用のフレーク、これは全然品質が違うん

です。厳しい品質管理をして、トレーサビリティにも対応して、今度、ボトルメーカー様、サントリーさんとかに供給し得るフレーク、そういうものを作ろうということで、今日も来ていただいています。協栄産業さんというパートナー会社に御協力する形で、この事業をやらせてきていただいていますということで現在に至っております。そういう意味では、先ほどマテリアルリサイクルという御紹介がございましたけれども、トータルでボトルメーカーさんに供給させていただくというところまで考えますと、これ、メカニカルリサイクルと呼んでいただいているのかなと。

メカニカルリサイクルというのは、先ほど申し上げました異物を徹底的にフレークからあと、また除去して行って、かつ分子レベルを変えずに、もう一回ボトルに戻すだけの粘度を確保する、I V値と言っていますけれども、そういう形にしてリサイクルすると。こういう形でリサイクルするという技術確立して、協栄産業さんと御一緒していると、そういうのが状況でございます。

川崎市内に関して申し上げますと、恐らく川崎市さんが集められている部分と店頭で回収させていただいている部分と、両方合わせまして、大体年間2,000トンぐらいかなと思っております。これは500ミリリットルのペットボトル1本が20グラムぐらいだとすると、年間1億本とかそれぐらいのリサイクルの量になりますけれども、それぐらいやらせていただいているということでございます。

今後でございますけれども、2023年9月に製鉄所の高炉が休止をすることを、もう既にJFEスチールのほうで発表しておりますけれども、私どもとしては、JFEグループの中で、リサイクル事業を今、製鉄所の中でやらせていただいている部分を、どうにかしてこれを維持、拡大をさせていただきたいということで、これはグループの中で討議ももちろんさせていただいておりますし、川崎市さんともいろいろお話をしながら、まさしく川崎市のプラの循環プロジェクトに資するような、そういうことをやっていければと考えておる次第でございます。

そういう意味で、これから市内循環、これも一つのキーワードでございますし、もう一つは水平リサイクル、製品を製品に戻すと、こういうことを中心に私どもとしては事業をやりたいと考えておりますので、このプロジェクトを本当に全面的に御協力させていただくようなことで考えております。どうぞよろしく願いいたします。

【司会】 露口様、ありがとうございました。

続きまして、ペトリファインテクノロジー株式会社代表取締役社長、伊賀大悟様、よろしく願いいたします。

【伊賀様】 ただいま御紹介にあずかりましたペトリファインテクノロジーの伊賀と申します。本日はよろしくお願ひいたします。

弊社は扇町に本社と工場を構えておりまして、2008年の創業以来、一貫してペットボトルのリサイクルに取り組んでまいりました。弊社では、独自のケミカルリサイクルの技術を有しておりまして、皆様が飲み終わった後の使用済みのペットボトルを原料として、再生ペット樹脂を製造するということで、ペットボトルからペットボトルへの回り続ける水平リサイクルを実現しております。今、川崎市さんのほうで回収されたペットボトルについても、当社でもリサイクルをさせていただいております。

2018年には、「あらゆるものを循環させる」というビジョンを掲げる日本環境設計グループに加わりまして、昨年10月には約4年間休止しておりました工場を本格的に再稼働させております。年間2万2,000トンの再生ペット樹脂を製造できる能力を有しておりまして、この2万2,000トンという量は、500ミリリットルのペットボトルに換算しますと、約10億本分に相当いたします、ということをごささせていただきます。

弊社のケミカルリサイクルの技術の特徴ですが、使用済みのペットボトルをまず化学的に分子レベルまで分解をした上で、そこに含まれる不純物を取り除いて、石油由来の樹脂と同等品質の再生ペット樹脂を製造するということにごさいます。それによって化石燃料及び石油資源の消費を減少させて、二酸化炭素の排出の削減に寄与してまいりたいと考えております。そして、石油資源に依存しないサステナブルな社会を未来につないでいけるように弊社も取り組んでまいり所存にごさいます。

このプラスチックの循環という世界が直面する非常に困難な課題に対して、ここ川崎市から世界に向けて、ここにいらっしゃる皆様と一緒に発信していけるように、まずは弊社の役割であるペットボトルの完全循環に向けて挑戦をしていきたいと考えております。どうぞよろしくお願ひいたします。

【司会】 伊賀様、ありがとうございました。

続きまして、アサヒ飲料株式会社常務取締役、大越洋二様、よろしくお願ひいたします。

【大越様】 皆さん、こんにちは。ただいま御紹介にあずかりましたアサヒ飲料の大越と申します。よろしくお願ひいたします。

まずは、本プロジェクトに参加させていただいたことに対しまして、深く御礼を申し上げます。大変光栄でございます。福田市長をはじめとして、川崎市役所の皆様方、それと本プロジェクトに参加されています参加企業の皆様方、深く御

礼を申し上げます。ありがとうございます。

さて、我々アサヒ飲料でございますけれども、容器包装2030という目標を掲げておりまして、2030年に全てのペットボトルをリサイクルペットなどの環境配慮素材を使用したものに置き換えていく、こういった目標を設定しておりまして、それに向かって事業を推進している状況でございます。

一方で、環境対策に対する基本方針ということで3つ掲げておりまして、1つは、新たな資源を極力使わないようにしようということ、それと、使った資源につきましては、できるだけ有効に活用していきましょうということ、3つ目でございますけれども、温室効果ガスを極力排出しないようにしよう、こういった3つの方針を掲げております。先ほど申し上げました容器包装の目標と、今申し上げました3つの環境に対する方針、こういったものに本プロジェクトは見事に合致しているということで、我々としては本プロジェクトに全力で参加させていただきたいなと思っている所存でございます。

先ほどからお話がございますけれども、市内にマテリアル、メカニカルリサイクルとケミカルリサイクルの両方の拠点を持つというのは、川崎市さんの大きな強みであるということでございますけれども、その強みを生かしました循環モデルに対しまして、我々はケミカルの環で参加できることを大変光栄に思っております。弊社といたしましては、先ほどお話がございましたけれども、ペトリファインテクノロジーさんのケミカルリサイクル技術で産出されますリサイクルペット樹脂を使用させていただいて、ボトルtoボトルの循環の一角を担わせていただくことで、かわさきプラスチック循環プロジェクトに貢献してまいりたいという所存でございますので、今後ともよろしく願いいたします。ありがとうございました。

【司会】 大越様、ありがとうございました。

続きまして、サントリーホールディングス株式会社執行役員・サプライチェーン本部副本部長、藤原正明様、よろしく願いいたします。

【藤原様】 皆様、改めましてこんにちは。ただいま御紹介いただきましたサントリーの藤原でございます。

まず初めに、本日、かわさきプラスチック循環プロジェクトということで、製造事業者に参加させていただくということで大変光栄に存じます。ありがとうございます。また、平素より我々の事業に非常に温かい御理解と御支援を賜っておりまして、非常に感謝しております。この場を借りて御礼を申し上げます。

さて、我々サントリーはプラスチック基本方針というのを掲げております。これは、

2030年までにグローバルで使用するペットボトルには、化石由来原料、この新規使用をゼロにするという目標でございます。このために非常に重要なポイントになるのが、今回取り組もうとしているボトルtoボトルの水平リサイクルということです。ペットボトルは御承知のとおり、石油由来の原料で作られているところですが、これを完全循環させることで、系内に取り込む化石由来原料を減らしていくと、最終的にはゼロにしたいという思いからこの活動を始めております。

既に昨年の実績では、我々の製造する国内飲料のペットボトルに関しては、37% Rペット、リサイクルペットに切り替わっております。今年は何とか意欲的に50%を超えたいという目標で頑張っていこうと考えております。そのためには非常に大切なポイントが、こういう水平リサイクルの取組になります。川崎市様の今回のプラスチック循環プロジェクトで、まずペットをやろうとお声がけいただきました。この取組に我々も厚く賛同いたしまして、この事業に参画させていただくことになりました。ありがとうございます。しっかり我々も地元の皆さんと一体になり、この活動を支援して、我々もしっかり考え、活動していきたいと思っております。地域の皆様とは一体になって、プラスチックの循環の社会、ごみをゼロにする社会、そして持続可能な経済というところを目指して一緒に頑張っていきたいなと思っております。

非常に簡単ではございますが、私からの御挨拶にさせていただきます。ありがとうございました。

【司会】 藤原様、ありがとうございました。

続きまして、株式会社イトーヨーカ堂CSR・SDGs推進部ゼネラルマネジャー、小山遊子様、よろしくお願いいたします。

【小山様】 皆様、こんにちは。ただいま御紹介いただきましたイトーヨーカ堂の小山でございます。本日は、こちらのかわさきプラスチック循環プロジェクトに参画させていただき、誠に光栄に存じます。ありがとうございます。私どもセブン&アイグループでは、「GREEN CHALLENGE 2050」という環境目標を掲げております。そのうちプラスチック対策につきましては、2050年までにオリジナル商品で使うプラスチックについては、環境配慮型100%を使っていこうという目標を掲げております。

我々、商品を提供するために、どうしても便利なプラスチックを使ってしまいうんですけれども、それをきちんと石油由来のものではないものをしていくことと、今回、こちらの循環をさせていくという課題に対して積極的に取り組んでいきたいと思っております。参加させていただいております。

イトーヨーカ堂では、2012年から店舗にペットボトル回収機を設置して、お客様と一緒に資源循環の取組を進めております。川崎市内におきましては、5店舗において回収機を設置しておりますので、今回のこのプロジェクトは、お客様と一緒に取り組むものという思いでこちらに立っております。

そのほかに、店舗ではスペースを活用しながら、環境活動をお客様に啓発して、一緒に取り組むことを進めておりますので、この活動も、プロジェクトを通じても資源循環の取組をより一層お客様にお伝えし、参画をしてみたいと思っております。ぜひ皆様方、これからも引き続きどうぞよろしくお願いいたします。

私からは以上でございます。

【司会】 小山様、ありがとうございました。

続きまして、株式会社セブン・イレブン・ジャパンサステナビリティ推進室ゼネラルマネジャー、吉田希美枝様、よろしくお願いいたします。

【吉田様】 ただいま御紹介いただきましたセブン・イレブン・ジャパンの吉田でございます。本日は、かわさきプラスチック循環プロジェクトに多くの企業様と一緒にこのような形で参加させていただきまして、誠にありがとうございます。大変光栄でございます。

私どもセブン・イレブン・ジャパンは、プラスチック資源を有効に活用していくことを目標に掲げておまして、中でもボトル to ボトルについては、今、非常に力を入れて進めている取組の一つでございます。私どもセブン・イレブンの店舗にペットボトル回収機というものを設置させていただいているんですが、全国で、この2月末で約1,600店舗に設置をしている状況でございます。各エリア、またお客様の御協力、行政の皆様の御協力をもって、この循環に取り組んでいる状況でございます。

ここ川崎市におきましても、まさに川崎市様の多大なる御協力をいただきまして、昨年7月よりペットボトル回収機の設置をスタートさせていただき、現在、120台の設置という状況でございます。また、これに際しましては、本日御参加されておりますJ&T環境様にも多大なる御協力をいただきまして、今、取組を進めている最中でございます。皆様御存じのとおり、この水平リサイクル、ボトル to ボトルというものにつきましては、私ども一企業では全く循環させることが難しい取組でございます。様々な方々の御協力をいただきながら、この取組は進むものと理解しております。

そういった中で今回、川崎市様のかわさきプラスチック循環プロジェクトという形で、行政の皆様、そして多くの企業の皆様と取り組むことができるという、こういった機会をいただいたものは、私ども、大変感慨深いものと感じております。私どもセ



ブン-イレブンの店舗で、お客様との接点が非常に多いという特性をしっかりと生かしながら、地域の皆様、お客様と一体となり、ボトルt o ボトルの取組をこれからも強化させてまいりたいと思っております。引き続き皆様の御理解と御協力をよろしくお願いいたします。

私からは以上でございます。

【司会】 吉田様、皆様、ありがとうございました。

それでは、本議題に関する質疑応答に入らせていただきます。なお、市政一般に関する質疑については、本議題の質疑が終了後、改めてお受けいたします。それでは、進行につきましては、幹事社様、よろしくお願いいたします。

【読売（幹事社）】 読売新聞です。どうもお世話さまでございます。

まず、かわプラ設立、これ、日付は何かあるんですか。本日ということなんですか。

【市長】 本日はです。

【読売（幹事社）】 それから、このメンバーは、また新たに加わってくるような想定のものなんですか。それとも、このメンバーで完結するようなことなんですか。

【市長】 ありがとうございます。このプロジェクトは今、ボトルt o ボトルのリサイクルから始めるということですのでけれども、このプロジェクトは拡大していきますので、新たな事業者様を今後加えていくという形になってくるかと思えます。

【読売（幹事社）】 ありがとうございます。それで、書いていただいたとおりに、新たな取組を推進する母体というか、グループをつくったというのがニュースだとは思いますが、当面、こういう取組をスタートさせるとか、あるいは数値的な目標としてこれを達成するとか、現時点で何か挙げられることはございますか。

【市長】 今、それぞれの事業者様からお話しいただいている、既にやっているプロジェクト、取組がありますが、それを一つのプロジェクトとして関連づけていくことがすごく大事だと思っています。市民の皆様が、自分たちの出したペットボトルというものがこういう形で、行政回収にしろ、あるいは店舗でも回収されて、それが必ず循環してくるんだということが分かるような形を見せていきたいと思っています。

【読売（幹事社）】 それから、プロジェクトということで、別に企業を立ち上げるわけじゃないんですけれども、グループの事務局的なことは市がなされる、市の環境局ということでもいいんでしょうか。

【市長】 はい、そのとおりです。

【読売（幹事社）】 今日発足ということなんですけれども、当面、何か予定されること、会合をすとかを含め、現時点で何かございますかね。

【市長】 それでは、事務方から。

【環境局廃棄物政策担当課長】 環境局です。当面見込まれている取組につきましては、やはり今、記者の方からいただきましたように、このグループの中での会合ですとか、また、それぞれの事業者様から寄せられる、例えばこういった取組をしたいですとか、プラスチックについて、こういった取組が欲しい、ペットボトルについては、まだまだこの分野が足りないとかというようなことを、意見出しも含めていただきまして、そういった取組に実証事業も踏まえながら進めていきたいと考えてございます。以上です。

【読売（幹事社）】 御担当の方に、私も不勉強なので伺いたいですけれども、セブンさん、ヨーカ堂さん以外のルートというんですかね、どんなルートで、どの程度のボリュームのものが、今、リサイクルされているんでしょうか。雑多な聞き方ですみませんけれども。

【環境局廃棄物政策担当課長】 今、川崎市で、例えば店頭回収されているようなところにつきましては、幾つかの小売事業者さんもございます。例えば、そういった事業者様につきましては、今後の取組として、仲間に入っていただくような取組をしたいと考えてございまして、今、そういったところの幾つかの事業者様の小売店舗、スーパーさんも含めて把握はしているんですけれども、こういったところを精度を上げて確認していきたいというところございまして、実際に今、イトーヨーカ堂様、セブン・イレブン様のほうで、川崎市内の事業者様、リサイクルさんのほうに回っているようなものにつきましては、150トンから200トンぐらいというような話をこの間少しいただいているところでございます。

【読売（幹事社）】 ありがとうございます。

私、ひとまず以上です。

【読売（幹事社）】 読売新聞です。担当課の方に、今の150トンから200トンというのは、年間ということでよろしいですか。

【環境局廃棄物政策担当課長】 先ほど、セブン・イレブン様からお話ありましてとおり、市内で店舗に回収ボックスを設置したのが7月からになってございますので、まだ1年はたっていないような数字だと承知しています。

【読売（幹事社）】 じゃ、昨年7月からこれまでにということですか……。

【環境局廃棄物政策担当課長】 はい。そのように取っていただいて結構です。

【読売（幹事社）】 分かりました。市長さんに伺いたいんですけれども、今回、ペットボトルで先行実施ということなんですけれども、どっかの段階で結果とか成果をまとめて分析したり発表したりされる御予定はありますか。

【市長】 それはできると思います。というのは、今、行政回収でやっているのも、毎年2億本ぐらい、5,300トン回収していると。それが今、2つの事業者さん、J&Tさんだとか、あるいはペトリファインテクノロジーさんのところに引き取られてリサイクルされているのもありますし、その数字は出せると思いますし、かつ、今の店舗さんがどのぐらいのというのは数値化できると考えています。

【読売（幹事社）】 まだ先行実施なので、これからどんどん広げていくということなんですけれども、実際、自分自身もペットボトルを使って、家のマンションのごみ捨て場で分別して捨てる場所まではするんですけれども、店舗に持って行ってまでやるかという、やったことないんですね。そういうことも含めて、実際、一般の市民にこういう取組を広げていくにはどういうことをされていきたいですか。

【市長】 やはり身近なところで回収できる環境をつくり出していくことが大切だと思います。それこそセブン-イレブンさん、イトーヨーカ堂さん、市内にもたくさんありますし、より多くのステークホルダーの人たちがこのプロジェクトに参加していただくことによって、もっと身近なところで回収できると。自宅でもそうですし、外でもという形になっていくといいかなと思っています。

【読売（幹事社）】 ありがとうございます。

【NHK（幹事社）】 幹事社、NHKです。担当課にお伺いしたいんですけれども、今回の事業でリサイクルを回していく量的な目標みたいなものはあるのでしょうか。

【環境局廃棄物政策担当課長】 量的な目標ですか。

【NHK（幹事社）】 はい。

【環境局廃棄物政策担当課長】 そういう意味では、今、川崎市では、今、市長からありましたように、5,300トンほどの行政回収をしてございますので、こういったものがしっかりと水平リサイクルに回るような取組を構築したいと思っています。そういう意味では今、2社さんに回っているものにつきましては全量が回っているわけではございませんので、そういったものの拡充も含めて、数字的なものとか、あとは店頭回収の、また、先ほど市長からもございましたけれども、今、120店舗、5店舗というような形でいただいておりますけれども、小売事業者様の御協力を得て、こういったところの拡充をして、拠点回収の場所と量を確保していきたいとは考えてございます。

【NHK（幹事社）】 まだ具体的なところは決まってない……。

【環境局廃棄物政策担当課長】 はい。まだその数字までは、これから皆様と御相談させていただきたいと考えています。

【NHK（幹事社）】 ちなみに、今はどのぐらいの量がリサイクルに回って……。

【環境局廃棄物政策担当課長】 行政回収についてですか。

【NHK（幹事社）】 はい。

【環境局廃棄物政策担当課長】 行政回収につきましては、現在、5,300トンのうち1,300トンずつをJ&T環境様とペトリファインテクノロジー様にお渡しするよう、令和4年度についてでございますけれども、予定になってございます。

【NHK（幹事社）】 各社さん、お願いします。

【朝日】 朝日新聞です。最終的には、現状、容器包装リサイクル協会に4分の3出していて、その割合のうち4分の1をPRTさんのほうに回すようなお話のようなんですが、最終的にリサイクル協会への拠出分をゼロにしていくというお考えなんですか。

【市長】 基本的には、市内で循環させるためには、市内事業者のリサイクルのところで処理をしていただくということなので、100%市内に循環させるということ、だから、容リ協ルートは使わなくなっていくということで、先ほどの5,300トンのうち両事業者の方に2,600トンが、今年度、渡るわけですけれども、それ以降、段階的に、事業者様と御相談しながらという形になりますが、市内に振り向けていきたいと思っています。

【朝日】 ゼロにするのは、目標年度ってもう決めているんでしょうか。

【市長】 いや、まだ決まっておりません。

【朝日】 ケミカルリサイクルについてお聞きしたいんですけれども、汚れた廃ペットでも水平リサイクルしやすいという特徴があるようなんですけれども、全国的に見て、ケミカルとマテリアルのリサイクルの比率と、あと、ケミカルの長所、短所について、社長さんに教えていただけたらうれしいです。

【伊賀様】 では、比率について回答させていただきたいと思いますが、今、日本国内において、ペットボトルの利用量がおおよそ60万トンでございます。そこに対して、当社の生産能力、処理能力が2万トンでございますので、おおよそ3.3%になります。

2番目の御質問が……。

【朝日】 ケミカルリサイクルの長所、短所です。

【伊賀様】 長所としましては、先ほどもお話しさせていただいたとおりにはなるんですけども、一度分子レベルまで分解した上で不純物を除去できるというところにございますので、多少異物を多く含む原料であっても、ペットボトル用途の樹脂に再生することができる点が長所でございます。

一方で短所については、これは設備の規模にもよるところはございますが、どうしても動力費であったりエネルギーコストが比較的高くついてしまう部分はございます。これについても、規模を拡大することで解決できるとは考えております。

以上です。

【朝日】 リサイクルコストは、物理的なマテリアルリサイクルに比べてどのぐらいかかるんですか。

【伊賀様】 具体的な金額については、すいません、回答を控えさせていただければと思います。

【朝日】 何倍ぐらいかかるとか。

【伊賀様】 どうでしょうかね。通常のメカニカルのリサイクルのコストについて私が承知しておりませんので、回答は控えさせていただきます。

【朝日】 国内では、メカニカルとケミカルの比率ってどのぐらいなんですか、リサイクルの業界では。

【伊賀様】 今のところ、ペットに関して申しますと、ケミカルリサイクルの工場は唯一当社のみでございますので、先ほどお話しした、ペットボトルであれば60万トン分の2万トンというのがケミカルリサイクルの比率になります。

【朝日】 国内唯一の技術を持っているということですか。世界的に見ると、どうなんですか。

【伊賀様】 商業規模で稼働している工場ということで申しますと、世界でも唯一、当社のみでございます。

【朝日】 ケミカルリサイクルというのは、PRT様しかできないということなんですか。

【伊賀様】 そうですね。商業規模での稼働で申しますと、当社のみです。

【朝日】 じゃ、主流は今までマテリアルリサイクルだったんですね。

【伊賀様】 はい、そのとおりです。

【時事】 時事通信です。バージンと言ったらいいのか分かりませんが、石油から直接作るペットとリサイクルって、単純比較ですと、まだリサイクルのほうが高くつくということなんですか、マテリアルにしてもケミカルにしても。

【露口様】 必ずしもそうは言えない。要は、バージンの価格というのは、石油の価格に連動して乱高下しますので、マテリアルリサイクルとかメカニカルリサイクルでやる価格が場合によっては安い場合もございます。ただ、今現在は両方とも上がってしまって、よく分からないと。

【時事】 これ、量が増えると、またコストは抑えられるという理解でいいですか。

【露口様】 メカニカルリサイクルが何で一般的かということ、やっぱり飲料メーカーさんから見て、ボトルt o ボトルにできるという意味では必要十分だというような品質は保持できているからということだと思っておりますので、そこら辺のところと、あと価格のほうで、当然分子レベル構造を維持したままやるか、それを1回分解してやるかというその差はどうしても出るんじゃないかなとは想像していますが、私自身はそこら辺は詳しくは、ケミカルリサイクルのほうは分かりませんので控えさせていただきます。

【時事】 あと、さっき、両者でおっしゃった年間2,000トンと2,200トンというのは、これは……。

【露口様】 2,000トンと申し上げたのは、川崎市内のあれです。先ほど川崎市さんから御説明ありました、いただいている部分と、あと、店頭回収でどれぐらいやれているかなというのを勘案したら、それぐらいになっているんじゃないかということとで申し上げた次第で、実際お受けしている量全体では1万5,000トンお受けしていますので、私どもの川崎のプラントでは。その中の2,000トン相当が市内に相当するのではないかと考えております。

【時事】 処理されている分としては年間に1万5,000トン、全国から集めて。

【露口様】 全国というか、当然それは関東圏という、輸送効率を考えるとそうなりますので。

【時事】 ありがとうございます。

【朝日】 すいません、社長にちょっと。物理的処理というのは、粉碎して熱で溶かすそうなんですけれども、その熱は高炉の熱を使っているんですか。

【露口様】 いえいえ。

【朝日】 また別の……。

【露口様】 それ、全く別で、私どもが申し上げるというよりも、これはサントリーさんと協栄産業さんでおやりになっている技術です。

【朝日】 そうですか。あと、頂いた資料、代表取締役で社長がついてないんですけれども、社長表記でも構わないんですよね。

【露口様】 もちろん。

【東京】 東京新聞です。よろしくお願ひします。今回のプロジェクトで、J & T環境さんですとかペトリファインテクノロジーさんについては、何となく川崎に拠点を置かれていてという部分が分かりやすいかなと思うんですけども、製造事業者さんですとか小売事業者さんが、川崎でのみリサイクルペットボトルの利用を促進されるとか、回収拠点も全国に置かれているかと思うので、今回、川崎で具体的にこういうことを全国に先駆けて取り組まれるとか、そういう具体的な取組があるのであれば教えていただけたらと思ったんですけども。

【大越様】 御質問ありがとうございます。もともと、我々アサヒ飲料としては、こういった取組の考え方として、一つ、ゆかりの地での、例えばですけども、工場所在地でというようなことが基本的な考え方にあるんですけども、ゆかりの地を少し拡大解釈いたしまして、今回はペトリファインテクノロジーさんの親会社の日本環境設計さんと、我々、融資をさせていただいているというような、そういうゆかりがございまして、その延長線上で今回、川崎市さんからペトリファインテクノロジーさんにお話があつて、そこからさらに私ども、ユーザーの立場としてお話があつたということで、今回、この取組に対しまして参画をさせていただいたという経緯でございます。よろしいでしょうか。

【東京】 その経緯は分かったんですけども、このプロジェクトの中で川崎で何か、こういう取組をされますというのとはまたちょっと違う……。

【大越様】 今回、ペトリファインテクノロジーさんから提供される、川崎市で回収されたケミカルリサイクル技術を使ったペット樹脂を、我々としては使わせていただくという立ち位置で参画をさせていただくということでございます。

【東京】 それがまた全国に出荷されていくというイメージでよろしいですか。

【大越様】 全国になるかどうかまでは定かではありませんけれども、ある一定のエリアで展開されることになるかと思ひます。

【東京】 それは川崎市外でもということになりますよね。

【大越様】 そうですね、はい。

【東京】 なるほど。分かりました。

【朝日】 資本関係はないんですね。特に融資だけですね。サントリー様も出資はされてないわけですね、P R T様とJ & T様。

【藤原様】 ございません。

【市長】 東京新聞さんの質問に対してよろしいですか。

【東京】 できたらもう少し、市も含めたそれぞれの方が川崎ではこういうことをしていきますみたいなことが分かれば、読者にとっても分かりやすいかなということちょっと感じたんですけども、市は行政回収されたものをリサイクルされるリサイクル事業者の方に振り分けられるということと、あとは市民に対する工場見学ですとか出前授業などもされていくということが書かれているのかなと思ったんですが。

【市長】 この取組の啓発は大いにやっていきたいと思っています。ですから、製品が、今御質問あったように、川崎市内に全てが戻ってくるわけではないですけども、理論的には、川崎市内で出されたペットボトルは必ずリサイクルされるんだという形をつくり上げていく、その第一歩だと思います。

先ほど申し上げたように、ボトル to ボトルの水平リサイクルというのは、市民にとっても非常に分かりやすい形になると思いますが、今後は容器包装プラスチックですとか、あるいはプラスチック製品だとかというものにも拡大していきますので、それを市内の事業者の皆さんがしっかりとリサイクルするという、そういう循環をつくり出していくことを市民の皆さんに理解していただいて、ペットボトルは今、90%は分別していただいています、容器包装リサイクルについては40%のリサイクル率になっているので、まだまだ伸び代があると思っていますし、市民の皆さんの御協力をいただきたいと思います。

そのリサイクルする能力というのは、たしかペットボトルで~~7.13~~倍、市内から排出される~~7.13~~倍ですよ。容器包装だと、たしか~~1.470~~倍ぐらいのリサイクルできる市内事業者がいて可能なので、そういったところと連携できるというのは、先ほど申し上げたとおり、川崎市内しかない、そういった意味では、市民の皆さんに行動変容を促す取組をしっかりとお伝えしていきたいと思っています。

【東京】 ありがとうございます。

【司会】 ほかに御質問はよろしいでしょうか。

それでは、写真撮影に移らせていただきます。関係者の皆様は前方の中央にお集まりください。報道機関の皆様も撮影のほど、よろしくお願ひします。

(写真撮影)

【司会】 写真撮影を終了いたします。どうもありがとうございました。プロジェクトの参加事業者様には、こちらで御退席をいただきます。ありがとうございました。

《市政一般》

《ウクライナ避難民への支援について》



【司会】 お待たせいたしました。それでは、市政一般に関する質疑に入らせていただきます。進行につきましては、幹事社様、よろしくお願いいたします。

【読売（幹事社）】 それでは、よろしくお願いいたします。

【市長】 よろしくよろしくお願いいたします。

【読売（幹事社）】 まず、前回は質問が出ましたが、ウクライナの関係、避難の受入れ、あるいは支援のあたり、何か最新の動きがあったら教えてください。

【市長】 まず、先日、36人と言ったような気がするんですけども、3月末日現在の市内ウクライナ籍の方、37人でございます。27世帯37名ということでございまして、4月7日から、この37名の方、27世帯の方に対する個別のヒアリングを行って、既に完了しております。完了しているといっても、ヒアリング、直接お会いできた方、あるいは不在だったので調査票というものを置いて、返信をしてくださいという形でお聞きしておりますけれども、そのうち、現在のところ、9世帯から返信が既にごさいました。まだ調査票が全て回収し切れてない状況でございますけれども、そのうち、家族や知人等の呼び寄せの希望については、3世帯がその希望があるという回答をしていただいております。6世帯については希望はないというのが回収された9世帯の状況でございます。それぞれ何が心配だとか求めているものは個々に違いますので、それに対応できるような御案内を今進めているところでございます。

まずは以上です。

【読売（幹事社）】 その3世帯が呼び寄せる人数みたいなことは何かあるのでしょうか。

【市長】 それぞれに聞いているとは思いますが、それほど大きな世帯ではないと聞いています。

【読売（幹事社）】 そういう希望があったとして、今後もし、それがかなう場合に、市としてはどんなところを支援ができるのでしょうか。

【市長】 これまでも申し上げましたけれども、例えば市営住宅のあっせんもそうですが、民間での支援の申出をいただいております。例えば住居の支援ですとか、あるいは就労の支援とかというのが、もし来られたら就労していただける環境にありますよとかという申出をいただいているので、それをしっかりマッチングさせていくことが必要かなと思っています。

【読売（幹事社）】 分かりました。

私、以上です。

### 《特別自治市について》

【読売（幹事社）】 同じく読売新聞です。5月6日に特別自治市の関係で、3政令市長と黒岩知事との会談が予定されていますけれども、この場では知事に何を伝えて、何を期待されるか。

【市長】 特別自治市のことについて、知事御本人に理解を深めていただくという大切な機会だと思いますので、そのことについて率直に市民目線からお話しさせていただきたいなと思っています。

【NHK（幹事社）】 幹事社からは以上です。

各社、お願いします。

### 《今後の市政への抱負について》

【朝日】 朝日新聞です。50代ということで、政治家として抱負を改めて。直近する政治課題で、早々に解決に向かいたい課題があれば教えていただきたい。

【市長】 本当に様々ありますけれども、今回のプラスチック循環の話もそうなんです。川崎市は本当に、現在のところ、一番CO<sub>2</sub>を多く出している都市から脱炭素への取組、大転換をしていかななくちゃいけない、まさに転換の真ただ中にあると思っていますので、それを実現することこそが持続可能な都市にする方法だと思っていますので、それにしっかり取り組みたいと思っています。

それから、地方自治の在り方、この特別自治市などもそうでありますけれども、繰り返しになりますが、持続可能な自治の在り方もしっかりと問うていきたいと思っていますし、もう一つ、持続可能な面で言えば、地域包括ケアということ、これまでも取り組んできましたけれども、ここに住み続けられるんだということを思っていただけのような、そんな仕組みづくりに、この3つの持続可能性というか、それにこれからも頑張っていきたいと思っています。

【朝日】 ありがとうございます。

【神奈川】 神奈川新聞です。特別自治市について、もう一つ伺います。協議がようやく実現しそうだというところで、これまでを振り返りますと、双方の見解の相違もありまして、話も順調ではなかったと思うんですけれども、そういったことも踏まえて、協議を前にどういったお気持ちでいらっしゃるのかお聞かせください。

【市長】 県の見解について申し上げたいこと、逆に直接説明したいなと思っていますし、これもありますので、そういう意味ではいい機会だなと思っていますし、これ、オープンな場でやることは素晴らしいことだなと思っています。率直な意見交換ができれば

ばいいなと思っています。

【神奈川】 もう少しよろしいですか。5月6日以降は、協議は継続してやられるのでしょうか。

【市長】 いつ以降ですか。

【神奈川】 5月6日以降。それ以降も継続してやられるのでしょうか。

【市長】 正直、1回でもって何かが一時的に解決するような話ではないと思いますので、5月6日、終わって見ないとどうなるか分かりませんが、やはり多くの方たちに理解を求めていく取組というのは、これからもしっかりと続けていかなくちゃいけないですし、知事もその一人であると思っています。

【神奈川】 県の理解を得るために、今後、協議の場でこういったお話をされるのか、今後の展望についても聞かせていただけますか。

【市長】 まず、特別自治市のことについて、知事に直接説明する機会がないものですから、そういった意味ではスタートだと思っています。

【神奈川】 展望については……。

【市長】 展望はどうなんですかね。理解していただけることを望んでおりますけれども。

【神奈川】 ありがとうございます。

【司会】 御質問はよろしいでしょうか。

それでは、以上をもちまして、定例市長記者会見を終了いたします。ありがとうございました。

(以上)

---

・この記録は、重複した言葉づかい、明らかな言い直しや質問項目などを整理した上で掲載しています。

(お問合せ) 川崎市役所総務企画局シティプロモーション推進室報道担当

電話番号：044(200)0312